

令和8年度
広島平和記念式典
参加中学生感想文集



伊勢市教育委員会

広島平和記念式典への中学生の参加について

旧伊勢市は、昭和五十九年の非核平和都市宣言の後、昭和六十一年に日本非核宣言都市自治体協議会に参加しました。そして、平成五年の八月六日に広島で開催された日本非核宣言自治体全国大会及び平和記念式典へ二名の市民代表を派遣したことを最初として、平成六年からは毎年、伊勢市の代表として中学生を派遣してきました。この取組は新市として平成十八年に非核平和都市となった以降も大切に続けてきました。例年市内の中学校の代表各二名が式典に参列し、ピースメッセンジャー（平和の使者）としての大役を務めています。

核兵器の廃絶と恒久平和の実現は、人類共通の願いであるとともに、平和な地球を次代に引き継いでいくことは、私たち切切な使命です。その意味においても、感性豊かな中学生が、原子爆弾が投下された八月六日に広島平和記念式典に参加し、「平和の尊さ」「命の尊さ」について体感することはたいへん意義深いことであると考えます。

また、毎年各中学校では平和への祈りを込めた千羽鶴やメッセージを参加中学生に託し、後の報告を通して全校生徒が平和について考える機会をもつなど様々な取組を継承しています。

伊勢市では、本事業を通して、広く市内の中学生が平和学習を深めることにより、恒久平和の実現に貢献する市民の育成をめざしています。

【伊勢市代表の派遣について】

平成五年	旧伊勢市民代表二名
平成六年	旧伊勢市中学生二名
平成七年～十年	旧伊勢市九中学校各一名 計九名
平成十一年～十七年	旧伊勢市九中学校各二名 計十八名
平成十八年	伊勢市十二中学校各二名 計二十四名
平成十九年～二十年	伊勢市十二中学校各一名 計十二名
平成二十一年～二十八年	伊勢市十二中学校各二名 計二十四名
平成二十九年～	伊勢市十一中学校各二名 計二十二名
令和元年	伊勢市十中学校各二名 計二十名
令和二年～四年	※派遣中止（新型コロナウイルスの影響）
令和五年～	伊勢市十中学校各二名 計二十名
※令和三・四年度は、伊勢市内にて平和学習会を実施し、市内十中学校から各二名、計二十名が参加した。	

令和八年度 参加行程

八月五日（水）

- ・「原爆の子の像」に千羽鶴献納
- ・原爆ドーム、原爆死没者慰霊碑見学
- ・被爆証言講話受講（講師：岡本 忠さん）
- ・平和記念資料館見学

八月六日（木）

- ・平和記念式典参列
- ・全国こども平和サミット参加

目次

平和への願いを受け継ぐ	二見	中学校	代表者	・	1
広島で学んだ平和の大切さ	二見	中学校	代表者	・	2
広島から受け取ったもの	小俣	中学校	代表者	・	3
繋ぐべき平和	小俣	中学校	代表者	・	4
広島で学んだことと、「平和」のために私たちができること	御菌	中学校	代表者	・	5
平和のためにできること	御菌	中学校	代表者	・	6
広島で実感した、平和への願い	倉田山	中学校	代表者	・	7
広島から学んだ平和の大切さ	倉田山	中学校	代表者	・	8
広島に行って	厚生	中学校	代表者	・	9
平和な世界にするために	厚生	中学校	代表者	・	10
戦争の記憶を薄れさせないために	伊勢宮川	中学校	代表者	・	11
核のない未来のために、今私たちができること	伊勢宮川	中学校	代表者	・	12
私たちが受け取ったもの	港	中学校	代表者	・	13
広島で学んだこと	港	中学校	代表者	・	14
広島記念式典に参加して	城田	中学校	代表者	・	15
広島で学んだこと	城田	中学校	代表者	・	16
戦争と広島	桜浜	中学校	代表者	・	17
原爆の悲劇を忘れない	桜浜	中学校	代表者	・	19
原爆と広島	五十鈴	中学校	代表者	・	20
平和の大切さ	五十鈴	中学校	代表者	・	21



平和への願いを受け継ぐ

二見中学校 代表者

私はピースメッセンジャーとして広島を訪れ、原爆について学びました。これまで、広島に原子爆弾が落とされ多くの人が亡くなったということを、授業やテレビで知っているだけでしたが、実際に資料を見たり、被爆した方の体験や思いを聴いたりして、今までとは違った重みを感じました。

特に印象に残ったのは、広島平和記念資料館で見た展示です。そこには、原爆によって被害を受けた人々の写真や遺品、当時の様子を伝える資料などが展示されていました。中でも、原爆の熱線や爆風によって傷ついた衣服や、持ち主の生活を想像させる遺品を見た時、原爆が単なる歴史上の出来事ではなく、一人ひとりの人生を突然奪ったものだ実感しました。そこにいた人たちにも家族がいて、友だちがいて、将来の夢があったはず。それが一瞬にして失われたことを考えると、胸が苦しくなりました。

また、平和記念公園を訪れたことで、広島で起きた出来事をより身近に感じる事ができました。原爆ドームは、原爆の凄まじさを今に伝える建物として残されています。原子爆弾が投下される前と後の原爆ドームを見比べて驚くとともに、戦争の恐ろしさや平和を守ることの大切さを強く感じました。私は普段の生活の中で、友だちと話したり、学校で勉強したりすることを当たり前

だと思っていました。しかし、その当たり前の日常が、平和だからこそ成り立っているのだと気づかされました。

今回の平和学習を通して、誰もが安心して生活し、自分の夢を持てることも平和のかたちの一つだと思いました。そして、その平和は自然に続いていくものではなく、一人ひとりが大切にしていく必要があるものだと感じました。

これから先、戦争を直接経験した人が少なくなっていく中で、広島で起きたことを忘れず、次の世代へ伝えていかなければいけません。今回、見て、聴いて、感じたことを大切にし、相手を思いやる気持ちを忘れないようにしたいです。

広島で学んだことは、過去の歴史を知るだけの学習ではなく、今を生きる自分たちが、これからどのような未来をつくらっていくのかを考える機会でした。今回感じた平和の尊さを忘れず、これからの日々を大切に過ごしていきたいです。

広島で学んだ平和の大切さ

二見中学校 代表者

私は今回、実際に広島平和記念式典に参加して、たくさんの方が平和について真剣に考えていることを知りました。式典の会場には多くの人が集まっていますが、とても静かで落ち着いた空気が広がっていました。その静かな雰囲気の中で、原爆によって亡くなった方々のことを思うと、改めて原爆の恐ろしさを実感しました。そして、「二度とこのような戦争を起こしてはいけない」「平和な世界をこれからも守っていかなければならない」と強く心に誓いました。

また、被爆者の方から、原爆が投下された時の体験について直接お話を聴く機会もありました。原爆が落とされた瞬間の様子や、その後に経験された計り知れない苦しみについてのお話は、心に強く残っています。今まで私は、原爆について教科書やテレビなどを通して学んできました。しかし、実際にその出来事を経験した方の「生の声」を聴くことで、教科書を読むだけでは分からない恐ろしさや痛みを感じることができました。特に、戦争によって普通の生活が一瞬で失われてしまうことの怖さを深く実感しました。

その後、平和記念資料館にも足を運びました。館内には、被害を受けた服や建物の一部、写真、絵、映像など、たくさん資料

が展示されていました。それらの資料は、原爆が人々の生活にどれほど大きな被害を与えたのかを生々しく伝えていました。展示を見ているうちに、だんだんつらい気持ちになり、私はすべてを最後まで見るのができませんでした。

しかし、それほどまでに悲惨な出来事だったからこそ、目をそらしてはいけないのだとも思いました。過去に何が起こったのかを知り、向き合うことが、同じ悲劇を繰り返さないために必要なのだと思います。

今回の広島での体験を通して、平和は決して当たり前にあるものではなく、多くの人々の努力によって守られているものなのだと学びました。今、私たちが家族や友だちと普通に過ごし、学校に通えることも、決して当たり前ではないのだと思います。今回見聴きしたことを忘れず、これからも戦争や原爆について学び続けたいです。そして、平和な毎日を大切にし、自分にできることを考えながら、平和の大切さを周りの人にも伝えていきたいです。

広島から受け取ったもの

小俣中学校 代表者

二日間の平和学習で、私はたくさんの貴重な体験をすることができました。学校で学んでいるだけでは知ることのできなかった事実を、自分の目で確かめることができたと感じています。

一日目、平和記念公園や慰霊碑を見学した際、「八十年前にここで戦争があったのだ」と強く実感しました。現在の広島市はとても大きく活気にあふれています。原爆投下によって大きな被害を受けたのに、ここまで復興できたのは素晴らしいことです。

それほど広島の人たちは努力をしてきたのだなと心から感銘を受けました。また、「原爆の子の像」へ千羽鶴を献納するために向かった際、驚いたことがあります。献納されている千羽鶴の数だけでなく、路上で佐々木禎子さんに関する絵本を読んでいる人がいたことです。中には偶然通りかかった人も立ち止まり、耳を傾けていました。「この人たちは戦争や原爆のことを決して風化させないようにしている」と知りました。その姿を見て強く心を打たれました。

街中から見えた原爆ドームも強く印象に残っています。近代的な街の中に煉瓦造りの建物が見え、「周りの景色が変わっても、あの時からずっと変わらず広島の変化を見守ってきたのだな」と思いました。

戦後八十一年の今、当時を生きていた人は少なくなっています。そのような中、私たちは岡本忠さんからの証言を聴くことができました。岡本さんは原爆の傷に長年悩まされ、その傷を隠すのをやめたのは七十歳頃だったそうです。被爆者の方々は、原爆症に生涯向き合い続けなければなりません。原爆の恐ろしさは、精神的、肉体的な傷が何年も癒えないことだと実感しました。

二日目、私たちは平和記念式典に参加しました。多くの外国人の方々も参列していました。この式典は日本だけのものではなく、世界全体で平和を祈る場なのだと感じました。代表の方々の言葉には平和への願いが込められていて、現地で直接聴いているだけに、その平和への思いが強く伝わってきました。

その後、私たちは全国こども平和サミットに参加し、被爆者の河野キヨ美さんからの証言を聴きました。河野さんは原爆投下時の絵を描いている方で、実際にその絵を見ながら講話を聴きました。描かれた悲惨な光景を目にすることで、当時の状況を具体的に感じ取ることができたと思います。

この二日間の体験は、戦争や原爆投下時のことをより詳しく私たちに伝えてくれました。しかし、本当に大切なのは、この学びや思いを他人に共有することだと思います。まずは自分の家族に広島で学んだことを話すことから始めたいと思います。そうして、広島で受け取った「平和へのバトン」を次の人へ繋いでいこうと思います。

繋ぐべき平和

小俣中学校 代表者

千羽鶴の献納や原爆ドーム、平和記念公園の見学、被爆体験者の方の講話、全国こども平和サミットなどを通して、私は、平和について深く考えることができました。実際に広島を訪れ、被爆された方のお話を直接聞いたことで、戦争や原爆は決して遠い過去の出来事ではないのだと強く実感しました。

一日目は、自分たちで折った千羽鶴を「原爆の子の像」に献納し、原爆ドームや平和記念公園を見学しました。実際にその場所に立つことで、かつてここで原子爆弾によって多くの命や日常が奪われたことを、より身近に感じました。また、被爆者である岡本さんから、原爆による被害やご自身の体験についてお話を聴きました。爆風や熱線、放射線によって多くの人の人生が奪われ、生き残った後も長年にわたり苦しみが続いたこと、岡本さん自身の被爆後の生活やそれによって感じたつらさや恥ずかしさなどの思いを知り、原爆のむごさを改めて感じました。たった一発の原爆が、これほど多くの人の人生を変えてしまったのだと知り、戦争の恐ろしさを強く感じました。

二日目に参加した平和記念式典では、広島市の小学生二人による「平和への誓い」が特に印象に残っています。自分より年下とは思えないほど堂々とした姿がとても頼もしく、感銘を受けまし

た。それと同時に、平和を守るためには一人ひとりが行動することが大切であり、私自身もその一人になればならないという思いがわいてきました。

その後参加した「全国こども平和サミット」では、国際連合事務次長の中満さんが「国連が最も大切になければならないのは、人々に希望を届けることだ」と話されていました。その言葉から、平和とはただ戦争が起きないことではなく、一人ひとりが希望を持ち、安心して暮らせる社会をつくるのだと学びました。

また、被爆体験証言者の河野さんのお話も心に残りました。原爆が投下された翌朝に広島へ向かった際、病院の花壇で自分と同じくらいの年齢の少年たちが何人も倒れていたのを見つけたそうです。そのお話から、若い人たちの命や未来が奪われていた事実を知り、「戦争を二度と繰り返してはならない」という思いが一層強くなりました。

現在も、世界では戦争が続いている国や地域がたくさんあります。今回の学習を通して、今の平和な生活は決して当たり前のことではなく、多くの人の願いや努力によって守られてきたものなのだと分かりました。今回学んだことを決して忘れず、平和について考え続け、周りの人にも伝えながら、私たちができることを考え行動し、平和を世界中に広げ、繋いでいきたいです。

広島で学んだことと、「平和」のために私たちができること

御園中学校 代表者

ボロボロになった学生服や黒く焼け焦げたお弁当箱。それが今も私の心に強く残っています。

広島と長崎に落とされた原爆や戦争によってたくさんの人が犠牲になったことは、これまでも学んで理解はしていました。しかし、広島平和記念資料館を訪れ、その学生服を見た時、教科書を見ていた時とは違う、胸が締め付けられるような気持ちになりました。私と同じような中学生が、その日も家族と過ごし、お弁当を楽しみに出かけた。確かにこの広島に生きていた。その事実と、八月六日に広島に落とされた一つの爆弾によってその命が奪われてしまったということが、制服を見た瞬間に悲惨な事実として突きつけられたからです。被爆体験講話で聴かせていただいた話では、戦争が終わった後も、自分の腕に残った傷を隠していたことや、今でも、原爆の後遺症によって苦しんでいる人がいるということを知りました。その話を聴いた時、戦争は遠い昔の話ではない、この戦争は今も続いているのだと思いました。

平和記念公園にある原爆死没者慰霊碑にはこんな言葉が刻まれています。「安らかに眠って下さい過ちは繰返しませぬから」。この言葉は原爆犠牲者の冥福を祈り、戦争を二度と繰り返さないという、私たちの平和への誓いの言葉です。私は、毎年テレビで平

和記念式典を見えています。学校でのピースメッセンジャーの発表会でも、何度もこの言葉を聴いてきました。しかし、実際に広島を訪れ、資料館や被爆体験者の岡本さんの話を聴いた後だと、その言葉に込められた人々の平和への思いを、これまで以上にとっても強く感じます。

広島を訪れるまで、戦争は怖いものだからと、昔のことだと知ろうとしていました。しかし自分の目で何があったのかを見て、直接話を聴いた時、もっと知らなくてはいけないと感じました。戦争があったことや、その戦争によって小さな子どもや私と同じくらいの学生、大人、たくさんの人たちが犠牲になったこと、その時何があったのか、当時を生きた人の思いをもっと知らなくてはいけないと思いました。

平和記念式典の「平和への誓い」に『平和』は誰かに与えられるものではない、自分たちでつくっていくもの』という言葉がありました。本当にその通りだと思えます。そのためには、過去のこと、今世界で起こっていることも知ろうとしなければならなと思います。しかし、戦争があった当時のことを知る人は年々少なくなっています。だからこそ、私たちは広島で見たこと、聴いたこと、感じたことを次の世代に伝え、受け取ったバトンを繋げて、何ができるかを考え続けていくことが大切だと思います。

平和のためにできること

御園中学校 代表者

私は今回、広島平和記念式典に参列するにあたり、初めて広島を訪れました。広島に着いた時、八十一年前のあの日、ここに原子爆弾が投下されたことなど想像もできないような雰囲気を感じました。そして、訪問した二日間で、その平穏な日常とかけ離れた、原子爆弾による恐ろしい出来事について学ぶことができました。

一日目に、広島平和記念公園にある「原爆の子の像」に各校の生徒が作った千羽鶴を献納し、その後に平和記念資料館に行きました。そこには、原子爆弾によって痛々しいけがをしている人々の写真がありました。皮膚が溶け、目もまともに開かなくなっている人、全身に大やけどを負い皮膚が黒くなり、人間の姿とは思えないような状態の人など、想像を絶するようなものばかりで、非常に心が痛くなりました。当時の様子を描いた絵は、まさに地獄そのものが描かれていて、どれも目を逸らしたくなるものばかりでした。私は、このような事実が広島であったことが信じられませんでした。しかし、これが現実であることと、たった一つの原子爆弾で、一瞬にしてたくさんの人の命が奪われたということに、恐ろしさを覚えました。

二日目には平和記念式典に参列しました。式典には世界各国か

ら多くの参列者が集まり、犠牲者への黙祷や、「平和への誓い」が行われました。特に心に残ったのはこども代表のスピーチです。

私たちと同じ世代の二名の代表が、「相手の気持ちを想像し、意見の違いがあっても認め、受け止めること。平和への思いを、自分なりの方法で表現すること。一人ひとりの小さな行動が、平和への後押しとなります。」と訴えていました。私はこれを聴き、この言葉を心に深く刻み、これから生きていこうと思いました。

この二日間、実際に広島を自分の目で見て、耳で聴き、体験したことで、原爆の恐ろしさや平和の尊さを強く感じました。また、私たちは平和を願うだけではなく、一人ひとりが自分にできることを考え、それを行動に移すことが大切だと思いました。この体験したことを、平和な世界をつくるために次世代へと伝えていきたいです。まずは周りの人に原爆の恐ろしさや平和の尊さを伝え、これからも世界平和を訴え続けていきます。

広島の地で学んだ平和の尊さ

倉田山中学校 代表者

今回の中学生ピースメッセンジャーの学習活動で、私は、戦争や核兵器というものを国家という大きな規模ではなく、地元や、一人の人間という単位の視点で考えることによって、これまで知らなかった残酷さを知りました。

まず、一つめに残酷だと感じたことは、戦争をすれば、罪のない人間が一人、また一人と殺され、その人の希望や未来を簡単に奪っていくことです。さらに、核兵器となれば、強烈な閃光と激しい爆音とともに、一瞬にしてたくさんの人が殺される、つまり、たくさんの希望や未来が奪われます。そのこと考えるだけで胸が痛くなりました。そして、この残酷さを、被爆によって色あせたボロボロの服や、焦げた弁当箱などの日用品といった、何気ない生活の跡が物語っていると感じました。

次に残酷だと思ったのは、原爆で被爆した時に、人々が目にした光景です。ある人は、上空に青白い光を見て、轟音を聞き、何が起こったかも分からないまま殺される。また、ある人は体が焼け、皮膚がはげて全身真っ赤になる。また、ある人はたくさんの死体を見て苦しむ。そして、ある人は、子どもに「お母さん、助けて。死にたくない。」と訴えられるも助けられず、そのまま死んでいく子どもを見て嘆く。このような、死んでいく人の痛みや悲

しみ、生き残った人の苦しみや、なぜ自分だけが生き残ってしまったんだという気持ち。物理的な痛みだけでなく、このような心情も含め、人々を痛めつけるところが残酷だと思いました。

さらに残酷だと思ったことは、核兵器の被害はその一瞬で終わらず、投下されてから八十一年経っても消えない苦しみがあるところだと思います。今でも、原爆の後遺症で苦しんでいる方がたくさんいらっしゃいます。八十一年前に原爆が落とされた場所は、現在は道路や建物に覆われていても、その土地には今も戦争の記憶や被害の爪痕が深く残っているのです。

このような戦争や核兵器の残酷さを知り、今こそ、八十一年前のヒロシマを多くの人が知り、平和へのバトンを繋いでいくべきだと感じました。私も、今回の体験を、周りの人に話したり、文化祭で発表したりして、平和へのバトンをつなぎたいと思います。

広島で実感した、平和への願い

倉田山中学校 代表者

私は中学校の代表として、広島平和記念式典に参加させていただきました。

一日目は折り鶴の献納や平和記念資料館、原爆ドーム、原爆の子の像の見学をし、被爆体験講話も伺いました。折り鶴の献納では、伊勢市のほかにも全国のさまざまな地域からたくさんの方々が折り鶴が納められており、平和記念式典や原爆に対する思いを持つ人が全国にたくさんいることを改めて実感しました。平和記念資料館では、多くの写真や展示物があり、言葉だけでは伝わりきらない現実を身をもって感じました。特に印象的だったのは、皮膚が深く傷ついた方や痛々しい姿の写真で、直視できないほどの惨状に原爆の真の恐ろしさを実感しました。原爆ドームは、原型を保っていること自体が奇跡だと思うほど、近くで見ると壁はボロボロで、教科書などの写真で見るとは全く違う迫力がありました。原爆の子の像の近くでは、モデルとなった佐々木禎子さんについて読み聞かせをしている方々の姿もお見かけしました。被爆体験講話では、写真や資料を見るだけでは分からない当時の細かな状況まで詳しく伺うことができ、原爆の恐ろしさはもろろんのこと、当時を生き抜いた方々が目にした光景の凄まじさを知ることができました。

二日目は平和記念式典に参加しました。会場には非常に多くの方が訪れており、日本だけでなく海外からも大勢お越しになっていました。入り口の警備も大変厳重で、このような重要な場所に自分が参加しているのだと改めて緊張感が高まりました。式が始まる前に周りを見渡すと、小・中・高校生から大学生、大人や高齢者の方々、そして外国の方まで、あらゆる世代・国籍の人々が集まっていました。年齢や国籍を問わず多くの方が式典に参加されており、平和を願う思いは国内にとどまらず世界中に広がっているのだと知りました。式典が始まり、内閣総理大臣や国際連合事務次長の方々のお話を聴きました。その挨拶の中には共感できる内容が多く、深く心に響きました。また、参列者代表として「平和への誓い」を述べた二人の小学生は、とても聴き取りやすい声で堂々としていて、「本当に小学生だろうか」と驚くと同時に、私自身も見習わなければと感じました。式典の終了後には、ニュースなどで見かける著名な方々の姿も目にしました。

私はこの二日間で、世界的に意義のある式典に参加させていただく貴重な経験をし、原爆の恐ろしさを改めて知るとともに、普段の学校生活では学べないことを多く体験できました。この貴重な学びは、将来に活かしていくべき大切な糧になると感じています。この経験をこれからも忘れることなく、日々平和を願い続けていきたいと思います。

広島に行つて

厚生中学校 代表者

私が学校の生徒を代表して広島平和記念式典に参加した理由は、自分にとって良い経験になると思ったからです。普段、学校の授業や教科書で戦争や原爆について学ぶことはあっても、実際に広島を訪れて式典に参加したり、資料館を見学したりすることはなかなかありません。

実際に式典に参加して、まず驚いたのは、思っていた以上に多くの人が集まっていたことです。会場には日本人だけではなく、世界中から多くの人が訪れていました。さまざまな国や地域から広島に集まり、平和を願っている姿を見て、この式典の大切さを実感しました。普段の生活では、世界中の人が同じ場所に集まって平和について考える機会はあまりありません。だからこそ、実際にその場にいることで、平和への思いが世界中でつながっているように感じました。原爆が投下された午前八時十五分に合わせて黙とうを行い、亡くなった方々に祈りを捧げました。静かな会場で多くの人が一斉に黙とうする姿から、平和を願う強い気持ちが感じられました。

今回、特に心に残ったのは広島平和記念資料館の見学です。資料館では、教科書に載っている写真だけでは分からない、原爆が投下された当時の様子の写真を見ることができました。そこにあ

った写真はとてもリアルで、原爆によって多くの人の命が一瞬で奪われたことが伝わってきました。被爆者が着ていたボロボロになった服や、真っ黒に焦げた遺品などを見てみると、心がギュツと締め付けられました。これまでの私は、戦争について「昔に起こった悲惨な出来事」としか思えていませんでした。しかし、実際の写真や映像を見て、そこには私たちと同じように幸せな毎日を過ごしていた人がいたんだと感じ、遠い昔の出来事ではないと思いました。

今回、実際に広島へ行ったことで、今ある平和は当たり前にくものではなく、多くの人の願いや努力によって守られているものなのだということが分かりました。これからは戦争や原爆について学んだことを忘れず、周りの人たちと平和について考えることを大切にしていきたいです。そして今、当たり前前に学校へ行ったり、美味しいご飯をたくさん食べられたりすることが当たり前だと思わずに、毎日を大切にしたいと思います。

平和な世界にするために

厚生中学校 代表者

私は八月五日と六日の二日間、広島を訪れ、戦争の悲惨さや平和の大切さを改めて知ることができました。

一日目の最初には、平和記念公園へ行き、慰霊碑を見学しました。慰霊碑に刻まれた「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」という文字を見て、戦争を二度と繰り返してはならないという人々の強い思いを感じました。慰霊碑を見学したあと、原爆の子の像へ、全校のみんなで折った千羽鶴を献納しました。次に原爆ドームに行きました。原爆ドームはテレビの映像や教科書の写真で見たことがありました。けれども、原爆ドームを目の前にすると、原子爆弾の威力の大きさと怖さが伝わってきて言葉が出なくなりました。そのあとに、岡本忠さんの被爆体験講話を聴きました。その講話で岡本さんは、「今日の話は、八十一年前のことだが昔話ではない。いつ原爆症を発症するか分からない恐怖と隣り合わせて生活している人がたくさんいる」とおっしゃっていました。この言葉から戦争は遠い昔の出来事ではなく、今も多くの人の人生に影を落としているものだと実感しました。

一日目の最後には、平和記念資料館を見学しました。私はこの場所が一番印象に残っています。そこには、広島戦争当時の写真や遺品、人々の言葉が展示されていました。私は展示されてい

る一つひとつに衝撃を受け、言葉では表せないほどの恐怖を感じました。

二日目には、平和記念式典に参加しました。朝早くから会場には長い行列ができていて、世界中からたくさんの方が集まっていました。日本以外の国の人々も、平和な世界を願っているのだと感じました。式典の中で、一分間の黙祷を捧げて静かに平和を願いました。式典のあと、全国こども平和サミットに参加しました。そこでは、戦争当時、中学二年生だった河野キヨ美さんからお話を聴きました。そのお話を聴いて、「二度と戦争を繰り返さないために、核兵器のない世界を実現しなくてはならない」という強い思いを持つことができました。

実際に広島へ行き、戦争のことを決して忘れてはいけなく強く感じました。戦争を経験していないからこそ、広島で見て、聴いて、感じたことを周りの人に伝え、「平和の大切さ」について考えてもらうきっかけをつくるのが大切だと思います。私自身も、戦争についてもっと知り、平和な世界を実現するために何ができるかを考えていこうと思います。

戦争の記憶を薄れさせないために

伊勢宮川中学校 代表者

八月五日と六日、私たちは広島を訪れました。まず最初に訪れたのは原爆死没者慰霊碑で、原爆で亡くなった方々に向け、お祈りをしました。その後、原爆の子の像へ千羽鶴を納めに行きました。この像は、十二歳で亡くなった佐々木禎子さんや、原爆で亡くなった大勢の子どもの慰霊のために建てられたものです。原爆によって、自分よりも若い人や同じくらいの子どもたちが早くして命を奪われてしまったのだと考えると、胸が痛くなりました。

また、一日目は岡本さんから、二日目は河野さんから、被爆体験講話をお聴きする機会がありました。お話の内容は、一瞬にして広島街が焼け野原になり、多くの命が奪われたというものでした。その中でも特に衝撃だったのは、全身に大やけどを負った人たちがいるにもかかわらず、水すらも満足にあげられず、ただ寝かせること以外何もしてあげられなかったという壮絶な状況です。たくさんの方のうめき声であふれ、傷ややけどがひどいのにもがき苦しみながら死を待つしかない状態で、「いっそ殺してくれ」とさえ言う人もいたといいます。その凄惨な話を聴き、原爆の残酷さを強く実感しました。さらに、被爆直後の症状だけでなく、やけどが治ったあともその痕が大きく盛り上がり、周囲の人々から

差別を受けるなど、被爆後も一生さまざまな苦しみに悩まされ続けなければならないという現実も知りました。原爆はその時の被害だけでなく、その人のその後の人生までも苦しめ続けるものなのだと思います。胸がさらに痛くなりました。今、被爆者の方々がだんだんと少なくなっている時代に、直接貴重なお話を聴かせてもらえたことは、自分にとって本当に大きな経験になりました。

私たちは広島平和記念資料館も訪れました。そこには、ひどいやけどを負った子どもの写真や、破片が体に突き刺さったり、服が焼けて全身の肌が剥がれ落ちたりしている言葉を失うような写真が展示されていました。資料館で目にしたものはどれも胸が締め付けられるほど悲慘なものばかりで、被爆直後の生々しい現実をより深く実感させられました。

今、こうした悲慘な現実を知り、それを他の人にも伝えていくことが大切だと感じています。現在も世界ではたくさんの方で戦争が起きているようですが、日本では戦争の記憶が少しずつ薄れてきているのではないのでしょうか。だからこそ、もう一度平和について真剣に考えていくことが大切だと思います。

核のない未来のために、今私たちができること

伊勢宮川中学校 代表者

私は八月五日と六日の二日間、広島を訪れました。

一日目の最初に行ったのは、平和記念公園での千羽鶴の献納と、原爆ドームの見学です。目の前にあった原爆ドームは、原爆が実際に投下された事実を、今でも生々しく物語っているように見えました。次に、被爆者の岡本さんのお話を聴きました。私はこれまで、被爆した「その時」の怖さばかりを考えていましたが、岡本さんは被爆したあとの生活についても話してくださいました。引越した先でなかなか周囲に受け入れてもらえなかったことや、生活が落ち着いてからも「被爆者だから」という理由で結婚に不安を抱えたことなどを聴き、私はとても衝撃を受けました。一度原爆の被害に遭うだけで、その人の人生が大きく狂わされてしまい、ずっとその苦しみを背負っていかなければならない。そう知った時、核兵器は絶対に人間には必要ないと強く確信しました。その後に行った平和記念資料館では、学校の授業では見られないような、実際の被爆者の写真がたくさん展示されていました。どれも想像を絶するほど痛々しく、全身に寒気が走りました。また、被爆者の持ち物を見た時、誰かの「当たり前の日常」が、原爆によって一瞬で奪われたんだと感じ、胸が締め付けられるような強い痛みを覚えました。

二日目は、平和記念式典に参加しました。会場には年齢や国籍を問わず、本当にたくさんの方が集まっていて、平和を願う気持ちには国を越えるんだと実感しました。そして午前八時十五分に黙祷をし、平和宣言を聴きながら、二度とあのような過ちを繰り返してはならない、核兵器を持つことや使用することは、決してあってはならないと強く心に誓いました。式典終了後、参加した全国王平和サミットでは、河野さんの被爆体験講話を聴きました。河野さんは、原爆が落ちてすぐの広島の様子を語ってくれました。避難する途中で見た火傷や怪我をした人たちは、とても人間の姿には見えなかったそうです。「あの日は地獄のようだった」と振り返る河野さんのお話を聴きながら、私の頭の中にもその地獄のような光景が浮かびました。

この二日間の広島訪問で、核兵器は人類に絶対に必要ないものだ改めて強く感じました。実際に現地を自分の足で訪れ、お話を聴いた者として、この悲劇を次の世代へ語り継ぎ、二度と悲惨な思いをする人が出ないように、自分にできる行動を起こしていかなければならないと思います。

私たちが受け取ったもの

港中学校 代表者

私は広島を訪れ、平和記念公園内を見学するとともに、平和記念式典に参加しました。これまで学校の授業で何度も、原子爆弾のことや戦争のことを学びました。現地に行っても、「今まで習ったことをもう一度習い、平和を祈る。」ただ、それだけのことだと思っていました。しかし、実際にその場所に立ってみると、今まで習ったはずのことなのに全く違う、比較にならないくらいの重みを感じました。

特に私の心が動いたのは、平和記念資料館に展示されていた被爆者の方々の遺品や写真、当時の人々の生活を伝える資料でした。それは授業で習うような「歴史の一部分」とは到底思えません。私たちと同じように、一人ひとりに家族や友だちがいて、苦しい中でも笑い合って暮らしていた日常があったことを強く感じました。そして、その日常がたった一発の原子爆弾によって破壊された現実を改めて知りました。

また、平和記念式典に参加したことも印象的でした。式典では、世界中から集まった多くの人が、亡くなった人たちを悼み、黙祷を捧げ、平和を誓っていました。その様子を見て、普段はあまり意識しない「平和」という二文字が、とても特別なものに見えました。「平和」は、戦争を経験したことのない私にとって、当たり

前のように思っていました。今、世界各地で戦争が起きているものの、どこか他人事のように考えてしまっていました。しかし実際に広島を訪れ、戦争について自分の目で見たこと、感じたことを通して、普段、家族や友だちと過ごしたり、学校へ行ったり、将来のことについて考えられたりするこの日常が、決して当たり前ではないことを痛感しました。

広島で過ごした二日間を通して、多くのことを学びました。その中でも特に強く感じたのは、「戦争を知らない世代だからこそ、戦争について知ることが大切」ということです。なぜなら、戦争の悲惨さを知ってこそ、平和への祈りというものが成立するのではないかと思ったからです。しかし、私たちは戦争を体験することとはできませんし、体験するような状態になってはいけません。私たちが知らない過去に何があったのか。それは資料館に残されたものや、被爆者の方々が語ってくださったことを通して知ることができます。そして被爆者の方々からバトンを受け取った私たちが、次の世代へとバトンを渡すことで、さらにその先へと受け継がれていきます。このバトンを絶やさないことが、私たちの役目だと感じました。

最後に、私が見て感じたことを自分だけのものにせず、周りの人に伝えていくことが、今の私にできる平和への第一歩だと考えています。そして、伝えることを通して、一人でも多くの人が戦争について考えるきっかけになれば良いと考えます。

広島で学んだこと

港中学校 代表者

私は、八月五日と六日の二日間、広島に行きました。そこで、戦争や原爆がどれほど悲惨なものなのか、改めて感じました。これまで、学校の授業やニュースなどで、広島に原爆が落とされたことや、多くの人が犠牲になったことを学んできました。しかし、実際に広島を訪れたことで、ただの昔話で終わらせてはいけないのだと思いました。

特に心に残ったのは、岡本忠さんの被爆体験講話です。実際に岡本さんの話を聞いたことによって、戦争の恐ろしさを肌で感じました。原爆は多くの人の命を奪っただけでなく、生き残った人たちの心や体にも大きな傷を負わせたことを知りました。岡本さんは一歳の時に被爆し、爆風で押しつぶされた家の下敷きとなり、左手首と頭、背中に傷を負いました。その傷を隠すために、中学生ごろから七十代まで年中長袖を着ていたそうです。それに、放射線の影響を心配して、結婚や子どもをもつことを諦めようとしたこともあったそうです。つまり、苦しい生活を送ってみえたのだと思いました。原爆が投下されてから何十年もの年月が経った今でも、放射線の影響に怯えながら生きている人など、悩みを抱えた人がたくさんいることを知りました。教科書などでは分からない苦しみや不安、家族や周りの人たちへの想いが伝わってきました。

した。

また、平和記念資料館では、原爆によってボロボロになった人や建物の写真、道具を見ることができました。写真や資料から、原爆が落とされるまでは、普段と変わらない生活を送っていたことが分かりました。しかし、その日常が原爆によって、突然奪われたのだと思うと、とても怖く感じました。真っ黒になった三輪車、焦げた学生服や着物などの展示物から、老若男女を問わず原爆の被害にあったことが分かり、胸が痛くなりました。

家に帰ってから、家族に学んできたことを話すと、私たちが暮らしている伊勢にも空襲があったことや、私の曾祖父も戦争で亡くなったことを教えてもらいました。自分の身近な地域や家族も、戦争の被害にあっていたことに、とても驚きました。

今回、広島を訪れたことで、家族や友人とともに過ごしている毎日、決して当たり前ではないことを改めて実感しました。今、平和な生活ができていることに感謝すると同時に、これから先も平和に暮らせるように、過去の悲惨な出来事を二度と繰り返さないという気持ちを大切にしていきたいと思います。これからも、原爆や戦争について学び、過去に起きたことを他人事として終わらせないようにしたいです。そして、ピースメッセンジャーとして、被爆者の方々の思いを受け継ぎ、それをたくさんの人々に伝えていきたいと思っています。この二日間は、平和な世界を実現させるために自分には何ができるのか、考えるきっかけとなりました。

広島記念式典に参加して

城田中学校 代表者

私は今回、広島平和記念式典に参加して、「平和とは何だろう」「今、私にできることは何だろう」と考えました。

私はこれまで、原爆や戦争の恐ろしさについて体験した人の話を聞いたことがありますでした。八十一年前の出来事は、自分の生活とはかけ離れすぎていて、式典に参加するまでは、正直あまり実感がありませんでした。平和記念式典に参加したことで、教科書で学ぶだけでは分からないことを感じ、今までとは違う気持ちになりました。

ホテルから式典会場に向かうと、そこにはたくさんの方が集まってきていて、あちらこちらから話し声が聞こえ、会場はざわついた雰囲気でした。しかし、黙祷が始まった瞬間、その空気は一変しました。さっきまで聞こえていた声がなくなり、静けさに包まれました。その静けさの中で、原爆によって命を落とした人や大切な人を失った人々のことが私の頭の中をめぐり、一瞬その時代へ引き込まれたような感覚になりました。そして、黙祷が終わり、目を開けるとそこには、今を生きるたくさんの人たちがいきました。「今、ここにいる人たちは、心を一つにして平和を祈っているんだ」と強く実感しました。

平穏な日常は、当たり前のように思えて、決して当たり前では

ないものだと思います。家族や仲間と笑って過ごせること、学校へ行けること、温かいご飯が食べられること。平和だからこでできることなのだと感じます。戦争は、突然どこからやってくるものではなく、人が起こすものなのだと思います。ほんの少しの考え方の違い、言葉の行き違いが争いにつながってしまうこともあります。戦争が始まれば多くのものを失います。そして、いつも「二度と戦争を繰り返してはいけない」という言葉にたどり着きます。けれども、今もどこかで争いが続き、苦しんでいる人たちがいます。そのことを思うと、「過去の出来事」として戦争を考えるだけではいけないと感じました。

では、私は何ができるだろう。大きなことはできなくても、まずは戦争や平和について知り、学んだことを身近な家族や仲間と話したいです。そして、自分の周りの人を大切にし、相手の気持ちを考えて行動していきたいです。意見が違った時には、否定せず、お互いを理解しようとする 것도、私がすぐにでもできる平和への一歩だと思っています。「平和を祈る」だけでなく「平和をつくるのは一人ひとりの行動なのだ」と感じます。私は、一日一日を大切に生きていきたいです。

広島で学んだこと

城田中学校 代表者

私は、八月五日、六日の二日間、学校の代表、そして伊勢市の中学生代表として、広島に行ってきました。この二日間で、戦争がどれだけ悲惨だったのかを肌で感じる事ができました。

広島に到着した時、最初に感じたことは、今の広島の間は八十年前に原爆が投下されたと思えないくらい繁栄しているということです。本当にこの場所に原爆が投下されたのかと感ずるくらいでした。

最初に、平和記念公園へ向かいました。公園内には原爆ドームや慰霊碑などがあり、見学をしました。原爆ドームは写真や教科書で何度も見たことがありましたが、実際に見てみると建物は大きく、周りにはがれきなどがあり、当時の戦争の悲惨さが分かり、とても残酷でした。

次に生徒全員が心を込めて一羽一羽折った千羽鶴の献納を行いました。折り鶴が納められているケースにはすでに、平和への願いが込められている千羽鶴がたくさん献納されていました。私たちの学校の千羽鶴も加わることで、世界平和に繋がってほしいと思いました。

その後は被爆者による被爆体験講話を聴きました。そこで自分が印象に残った部分は、原爆投下から八十一年経っても原爆症に

悩まされるということです。被爆者は、生きている限り原爆症の不安が消えないということが衝撃的でした。原爆症とは、原爆の爆発で放出された大量の放射線が人体に与えた深刻な身体障がい総称で、被爆直後の急性障がいと、被爆してから数年、数十年後に、がんや白血病などが現れる後障がいに分けられ、その後障がいへの不安が生きている限り消えないということを教えてもらいました。

二日目には平和記念式典に参列しました。朝早くから多くの人が集まり、黙祷を行いました。その後は広島市長の平和宣言、広島市の小学生代表による「平和への誓い」、そして内閣総理大臣などの挨拶があり、どの言葉も胸を打つものでした。そして、私自身も世界中の核兵器廃絶や世界平和を祈りました。

広島で起きたことは、「怖い」「悲惨」などの簡単な言葉では言い表せないほど残酷な出来事です。そのことを、私たちは決して忘れてはいけません。だから、私は広島を訪問したことを決して無駄にせず、世界平和に向け、「ピースメッセンジャー」として次の世代や周りの人々に戦争の悲惨さや平和の尊さを伝え、これからも世界平和を訴え続けていきたいと思いました。

戦争と広島

桜浜中学校 代表者

私は今まで戦争から目を背けてきたのかもしれませんが。血などの痛々しい描写が得意ではないため、向き合うことができませんでした。しかし、今回広島を訪れたことで、世界で唯一の被爆国の人間として向き合わなければいけないと思いました。見学地では、目を背けたくなるような場面が多かったですが、私を感じ取った広島姿を伝えようと思います。

初日は平和記念公園を訪れ、千羽鶴を献納したあと、被爆体験講話を聴きました。原爆の子の像を目の前にして、私は大きな勇気をもらいました。モデルとなっている佐々木禎子さんは、被爆により白血病を発症しました。もしも自分が同じ立場に置かれたら、前向きになれず絶望してしまうと思います。それでも諦めずに鶴を折り続けた姿に、強い意志を感じました。その後訪れた資料館には、実際に禎子さんが折った鶴が展示されていました。どれもとてもきれいに折られており、思いの深さが伝わってきました。

続いて受講した被爆体験講話で驚いたのは、原爆を上空六百メートルで炸裂させた理由でした。被害が最も大きくなるよう計算されていたことを知り、鳥肌が立ちました。人間が行ったことの恐ろしさを痛感しました。講師の岡本さんが語った「この話は八

十年前の話だが、決して昔話ではない」という言葉が心に残っています。風化させないためには、私たちが歴史のバトンを受け取り、行動しなければなりません。次の世代へと引き継いでいかなければ、恐ろしさを忘れ、また同じ過ちを繰り返してしまうかもしれません。だからこそ、この貴重な体験を多くの人に伝えようと思いました。

その後、平和記念資料館へ向かいました。館内には人々が「生きた証」が数多く展示されていました。黒焦げになった弁当箱や制服、生きたかった人々の言葉。目を背けたくなるものが無数にあり、何度も胸が締め付けられました。中には「本当にこれは人なのだろうか」と疑うような写真もありました。

しかし、これらはすべて事実です。八十年前に起こった「戦争」という現実なのです。言葉では言い表せない重みを資料館で一番強く感じました。正直なところ、怖さや息苦しさもありました。それでも、「私たちが本当に見なければいけないのは、この事実なのだ」と強く実感しました。

二日目は広島平和記念式典に参加しました。特に印象深かったことは、黙祷と「平和への誓い」です。黙祷の間、被爆された方々の思いや資料館で見た写真が頭に浮かび、「同じ過ちを絶対に繰り返さない」と強く心に誓いました。また、「平和への誓い」を聴き、今こうして生きている時間は決して当たり前ではないのだと改めて気づかされました。

この二日間を通して、授業だけでは分からない多くのことを学ぶことができました。戦争の恐ろしさを家族や周りの友だち、次の世代に伝えていこうと思います。そして、今ある環境に感謝しながら一日一日を全力で生きようと決意した二日間でした。

原爆の悲劇を忘れない

桜浜中学校 代表者

「たった一発の原子爆弾が、人々の暮らしを、人生を地獄に変えました。」広島平和記念式典に参加し、「平和への誓い」を聴いて、私が一番衝撃を受けた言葉です。令和八年八月六日午前八時十五分、原子爆弾が落とされたその時間、その場所で、平和の鐘とともに原爆犠牲者に祈りを捧げました。八十一年前のこの瞬間、一瞬で多くの尊い命が失われ、当たり前の日常が奪われたことを肌で感じ、胸が張り裂ける思いがしました。私は二日間広島を訪れ、原爆の恐ろしさや当時の様子、そして被爆された方々の思いを実際に自分の目で見て、耳で聴き、学び、貴重な経験をさせていただきました。

一つめは、平和記念資料館の見学です。資料館には、原爆犠牲者の遺品や当時の悲劇を示す写真などが展示されていて、心が痛みました。被爆直後の「ヒロシマ」の写真や映像、黒く焦げたお弁当箱や三輪車、当時の子どもたちが着ていた服などから、一瞬で日常が奪われたこと、原爆の残酷さと戦争の悲惨さが強く伝わりました。展示一つひとつが被爆した実物で、教科書などの資料や映像とは違う強い衝撃があり、言葉では言い尽くせない感情になりました。ここは単に過去を伝える場所ではなく、平和について世界中の人々とともに気づき、行動するきっかけをつくっていく

れる場所だと感じました。

二つめは、岡本忠さんの被爆体験講話です。授業などで戦争や原爆のことを学びましたが、岡本さんが伝えてくださった言葉一つひとつは、実体験ならではの生々しさがあり、今まで見聞きしたことは比べものにならない重みがありました。原爆が投下され、命や街が奪われただけでなく、当たり前の日常や人々の未来まで奪ってしまったのだと感じました。そして、「生きたかった人々」「生き続けた人々」の思いや、原爆症に今もなお苦しんでいる人がいることも知りました。被爆者が減少していく中、岡本さんは私たちにこのようなメッセージを伝えました。「聴いたこと、見たこと、感じたことを忘れないで家族や友人に伝えていってください。そして、受け取ったバトンは必ず次の人に繋いでいってください。」私はこのメッセージを心に刻み、今を生きる世代として、戦争体験者や被爆者から直接話を聴くことのできる最後の世代として、未来へ伝えること、そして伝えるだけでなく同じことを繰り返さない、繰り返させない世界をつくっていく使命があると強く感じました。

広島での経験を通して、私は平和の尊さを改めて実感しました。そして、私たちが世界中の人々とともに「平和」をつくり上げていく必要があります。私は核兵器のない世界の実現に向けて、ピースメッセンジャーとして広島で感じたこと、学んだことを未来へ伝え、行動していきたいです。

原爆と広島

五十鈴中学校 代表者

八月五日、私たちは、広島に到着しました。到着した後、最初に平和記念公園へ行き、千羽鶴を献納しました。その後は原爆ドームを見学しました。原爆ドームの中に、がれきが散乱しているのを初めて知りました。教科書などではしか見たことがなかったのので、大変勉強になりました。続いて、岡本忠さんの被爆体験講話を聴きました。講話では、岡本さんが一歳で被爆した時のお話を聴くことができ、貴重な時間を過ごすことができました。お話を聴いて一番印象に残っていることは、原爆の爆風によって橋が持ち上げられたことです。あんなにも重いものが持ち上げられてしまう原爆は、とても怖いものだと思えて実感しました。

二日目は、今回のメインである広島平和記念式典に参加しました。広島市長の平和宣言では、今も核を脅しの道具として使っている国があることから、このままでは第二次世界大戦の時代に帰してしまうことや、自国の繁栄のための武力行使を認めてしまうと、第三のヒロシマ・ナガサキをつくり出すことになりかねないことへの危惧が語られていました。小学生代表による「平和への誓い」では、当たり前の日常が奪われた悲しい現実と向き合い、行動していく決意が述べられました。平和記念式典の後は、国際会議場で「全国こども平和サミット」に参加しました。最初に国

連事務次長の中満泉さんの挨拶がありました。挨拶の中で「平和とは戦争がないだけでなく、一人ひとりの思いが言えること」とおっしゃっていたことが一番印象に残りました。続いて、広島市立特別支援学校高等部の人たちが歌を発表しました。後ろのスクリーンでは、生徒たちが書いた平和へのメッセージが流れていました。歌の後は、河野キヨ美さんによる被爆体験講話を聴きました。河野さんは十四歳で被爆した時のことを話してくださいました。当時の学校では、「ペン」ではなく「なぎなた」を持ち、敵を討つ訓練をしていたそうです。河野さんは、原爆が投下された時は遠く離れた家にいたそうですが、姉を捜すために広島市内に入り、残っていた放射性物質によって被爆したそうです。私は、原爆が投下された時に爆心地付近にいた人だけが被爆すると思っていたので、入市被爆という事実を知り驚きました。

広島に行き、改めて原爆の脅威を感じました。原爆の悲惨さをピースメッセンジャーとして次の世代の人々に伝えていこうと思いました。

平和の大切さ

五十鈴中学校 代表者

私は、中学校の代表として広島を訪れ、平和の大切さについて考える二日間を過ごしました。これまではニュースや授業でしか見たり聴いたりしたことがありませんでした。しかし、実際に広島に行き、自分の目で見たり、被爆者の方のお話を聴いたりしたことは、これまでの自分の考えを大きく変えるものでした。

一日目は、緑がきれいな広島平和記念公園を歩きました。まずは原爆死没者慰霊碑の前で亡くなった方々のご冥福を祈り、手を合わせました。そのあと、平和への願いを込めて折った折り鶴をケースの中に献納しました。たくさん献納されている折り鶴を見て、世界中の人たちが平和を望んでいるのだと実感しました。次に一歳の時に被爆した岡本忠さんのお話を聴きました。岡本さんが被爆したのは今から八十一年前ですが、今も後遺症に悩まされていることに、強い衝撃を受けました。原爆による被害は、あの日の一瞬だけで終わったのではなく、八十一年間ずっと被爆者を苦しめ続けているのだと痛感しました。最後に広島平和記念資料館に行き、黒焦げのお弁当箱やボロボロになった衣服などを見ました。自分と同じような年齢の人たちの日常が、たった一発の原爆によって奪われたという現実には、胸がとても痛くなりました。

二日目は、朝から広島平和記念式典に参列しました。午前八時

十五分に「平和の鐘」が鳴り、会場にいる全員で黙祷をした瞬間、歴史の重みのようなものが胸にグツとききました。遺族や被爆者の方々の言葉からは、二度とこのような出来事を繰り返してはいけないという強い意志と、世界平和実現のための祈りが伝わってきました。命の尊さと平和の価値を次世代へ語り継いでいくべきだと強く実感しました。式典の後には、「全国子ども平和サミット」に参加しました。全国から集まった同世代の仲間たちと、平和についての話を聴き、命の尊さについて学ぶことができました。

私は、実際に被爆した方からお話を聴いた、伊勢市の数少ない「ピースメッセンジャー」として、受け継いだ話を自分の中に留めておくだけではなく、他の人にもすすんで話していくことが大切だと思いました。この二日間は自分にとって、忘れることのできない経験になりました。広島で学んだことを通して、今自分たちには何ができるのかを考え、行動していくにはどうすればよいかを意識しながら日々生活していきたいです。



令和8年度 広島平和記念式典参加中学生感想文集

編集 伊勢市教育委員会

発行 令和8年10月